

資料５－１ 基盤研究（動物研究分野）中間評価（H28-32 年度）

意義・目標の 妥当性	妥当な目標設定である。ただ、研究者コミュニティ内での共通認識・価値観だけでなく、社会全般からの要望への対応について、以前にも増してわかりやすい言葉で述べるのが、機会あるごとに求められる昨今の教育研究業界・博物館業界の事情を考えるならば、やや具体的で緊急性を感じさせる語を、もう少しだけ手短に盛り込めたらとも感じられた。例えば５頁の蛾類の平成 28 年度の箇所で「（分類学的多様性の解明が不十分なままに放置されることで、結果的にその存在が）知られないまま絶滅の危機に瀕している種も多いと推察される。」というあたりの認識は、植物も含め一般に通じにくく、系統分類学的研究推進事業における緊急性の説明として、もう少し強調し露出度を上げた方が良いように感じられた。例えば発見される種が悉く環境省のレッドリストに最上位を含む絶滅危惧諸カテゴリーで追加されている現状などは、このことの一つの証左として、手短に挙げ、強調することができると思われる。	
実施体制の 妥当性	館内研究員を中心に外部の専門家も加わり幅広い共同研究の体制が組まれている。本研究の意義・目標に鑑みて妥当な実施体制となっている。	
進捗状況の 妥当性	中間段階のものであるということも加味して考えるならば、ここまでの成果内容の説明とともに挙げられているアウトプットは、その内容、質、量のいずれの面においても、目標の達成が順調に進展していることを反映していて評価できるものである。	
総合評価	A	S：大変優れた成果をあげている。 A：目標に向けて順調に進捗している。 B：順調ではないものの進捗している。 C：進捗していない。
全体コメント	コレクションの収集について、寄贈受入、地域ターゲットを定めたインベントリー構築、日本で希少な標本資料の収集など注目すべき成果とともに、着実に収蔵数を増やしており、堅実な活動と高く評価できる。しかしながら日本で唯一の国立の自然史博物館としては、他の欧米の先進国に比べ著しく標本収蔵数が少ない状況で、さらに積極的な標本収集体制と目標値設定の見直しが強く求められる。特に収蔵スペース不足が制限要因となっていることから、つくば以外の他地域に収蔵施設を設置するなど、全国をカバーするより発展的な収蔵計画の検討を期待する。大規模災害を踏まえたリスク回避の点からも、つくばの一極集中型の収蔵方法を見直す必要も検討いただきたい。また収蔵標本の保存の質を上げるため、専門家、コレクションマネージャーなど人的な配置についての検討も期待する。	

資料５－２ 基盤研究（植物研究分野）中間評価(H28-32 年度)

意義・目標の 妥当性	植物や菌類（一部の原核生物も含む）の乾燥標本を収集し、維管束植物については植物園で栽培するための生体標本も収集し、各標本について生態や物質代謝など多様性科学の基盤となる情報も収集している。それらの情報を総合して進化学的研究や保全のための研究に取り組んでいるのは、科博の基盤研究として適切であり、大いに意義がある。	
実施体制の 妥当性	被子植物、裸子植物、シダ植物、コケ植物、藻類、地衣類、菌類等の専門家を揃えている。研究手法も生態、物質代謝、生理、分子系統なども含めて、多様な手法を用いることができる体制を整えており、実施体制は妥当である。	
進捗状況の 妥当性	標本収集では目標を超える数の標本を収集している。さらに、日本産の固有植物種、絶滅危惧種を中心に多様な手法を用いて多様な情報を収集し、これらの進化学的理解を深め、さらに適切な保全のために有用な基礎情報も提供している。目標に向けて順調に研究が進捗していると考えられる。	
総合評価	A	S：大変優れた成果をあげている。 A：目標に向けて順調に進捗している。 B：順調ではないものの進捗している。 C：進捗していない。
全体コメント	多様性科学、進化生物学の視点で見ても、レベルの高い研究を行い、研究成果を多数の学術論文として発表している。 絶滅危惧種の収集、栽培を主とした収集活動、大学や他の博物館と連携した標本収集・受け入れが積極的に行われており、高く評価できる。種子植物とシダ植物については、絶滅危惧種と日本固有種を中心に収集し、筑波実験植物園で栽培することで系統保存に努めていることも高く評価できる。 標本の収集数については、生物群ごとに各年度で標本庫に新たに収蔵した標本数を棒グラフなどで示してもらおうと、標本の集積がどのように進んでいるかが一目で分かり、自己評価を適切に行う上でも有用ではないかと思われる。なお、標本収集の評価として、標本数（量）のみならず分類整理レベル（質）も見られることが望ましい。例えば、評価シートに、標本増加分の内訳（入手先：寄贈、野外収集、交換；整理レベル：未整理状態からデータベース入力済みまで）が記されていると、標本収集実態が見える化され、目標値の設定や収集計画が具体化されやすくなり、評価がより意味のあるものになると思われる。また、未整理標本が多く収蔵されている点を改善するため、市民参加型のボランティアを活用するなどの試みも必要かと思われる。	

資料５－３ 基盤研究（地学研究分野）中間評価(H28-32 年度)

意義・目標の 妥当性	2つのテーマを設けて基盤研究を進めているが、いずれも国立科学博物館の使命に沿ったもので、妥当である。	
実施体制の 妥当性	限られた人員ながら効率的に作業が進められており、妥当である。	
進捗状況の 妥当性	計画に沿って作業を進め、順調に成果を出している。新種の発見に加えて、チバニアン提案など国内外の多くの人の期待を集める成果もある。	
総合評価	A	S：大変優れた成果をあげている。 A：目標に向けて順調に進捗している。 B：順調ではないものの進捗している。 C：進捗していない。
全体コメント	鉱物科学グループではあえて本邦周辺の2つのプレートの名称を挙げて、本基盤研究の焦点を絞っているが、我が国のナショナルセンターとして、常に46億年の時間軸と全球規模の空間を念頭においた基盤研究として推進することを期待する。 大学などから大型コレクションの受入が積極的に行われており、意欲的な収集活動は高く評価できる。また、コレクションを活用した新種記載やチバニアンに関わる研究成果があり、博物館の収蔵標本を基軸とした研究活動が行われており高く評価できる。最近の大学の基盤的な研究費の減少や組織・人員縮小の加速化により、大学が所有するコレクションの散逸・廃棄の危機が高まっており、将来大きな問題となると思われる。論文等に初めて記載・報告されたタイプ標本は永続的に管理保存され、配分や再調査等の世界からの多様な要望に対応できる状況におかれるべきものでも廃棄されている可能性がある。これまでに大学から科博へのコレクション移動が進められている実績はあるが、より一層積極的な収集・受入と国内の自然史研究体制のサポートを期待する。ただしそのためには、国立科学博物館の収蔵施設と人員の拡充が望まれる。	

資料５－４ 基盤研究（人類研究分野）中間評価（H28-32 年度）

意義・目標の 妥当性	文書や古文書ではわからない人間の歴史を明らかにすることは重要である。旧石器時代から江戸時代まで広い範囲を対象としているが、生活史復元に焦点を当てたことが特に評価できる。	
実施体制の 妥当性	江戸時代の人骨資料について出土地の教育委員会と連携して数百体を受け入れており、こうした豊富な資料と協力体制により、本研究が推進されるものと思われ、妥当であると考え。しかしながら、少ない研究員数で広い時代範囲をカバーしている現状について、標本整理専門のスタッフを雇用しているが、急速に集まっている江戸時代人骨に十分に対応できるか若干懸念がある。	
進捗状況の妥 当性	目標を十分に達成している。更新世人骨の研究、DNA 解析によって新たな知見が得られつつあることが評価できる。更新世後期から縄文・弥生・古墳期における日本列島の人類集団形成の研究に加えて、通史として日本列島の人類について体系的に捉えることが可能となると思われる。江戸時代人骨の収集は今後続くと思われるが、博物館コレクションの形成に大きく寄与するだけでなく、今後の更なる研究が期待できる。	
総合評価	A	S：大変優れた成果をあげている。 A：目標に向けて順調に進捗している。 B：順調ではないものの進捗している。 C：進捗していない。
全体コメント	江戸時代を対象に生活史復元をするとの目標は、大変興味深い。江戸時代は 150 年前のことであるが、日本人の歴史の中で最も身長が低いにもかかわらず顔面や頭部は現代人に近づきつつあるという点で特殊な時代である。小児人骨を使って成長過程の復元等を行うことで、形態の時代変化のメカニズムが明らかになることが期待できる。更新世人骨も含め、5 年間では終了しないテーマだと思われるが、その後の研究の発展も期待できる。 標本については、江戸時代の人骨を大量に受け入れるなど膨大な標本の収集が行われている一方、すでに深刻な収蔵スペース不足が懸念されているとのことで、将来を見越した収蔵スペース増加に向けて取り組んでいただきたい。欧米の博物館に比べ、科博の収蔵点数は著しく少ないという状況を多くの市民にも認識してもらう必要があると思われる。日本国を代表する（唯一の自然史）博物館として、収蔵標本の充実を目指すよう期待する。地域の教育委員会とも連携して人骨受入を積極的に行われており、収集活動は高く評価できる。	

資料５－５ 基盤研究（理工学研究分野）中間評価（H28-32 年度）

意義・目標の 妥当性	近年の急速な時代変化の中、多くの貴重な資料が廃棄されたり、災害などで失われたりしている状況がある。そうしたなかで、科学技術史資料が経年変化のため劣化したり、また資料保存スペースの確保ができなかったり、その価値を判断できずに廃棄されたりするケースが多くなってきている。そうした意味で、本研究の意義は大きい。本研究のうち、科学技術史に関しては、3D プリンターの活用など、挑戦的な目標もあげ、興味深い研究課題を目標としてあげている。宇宙地球史については妥当で適切な目標と思われる。産業技術史に関しては、これまで成果をあげてきた調査プロジェクトを継続して行うものであり妥当である。	
実施体制の 妥当性	理工学研究部と産業技術史資料情報センターの研究員とともに、館外の多くの研究機関や企業、団体、研究者との協力体制や研究参画により、本研究の実施体制は優れたものである。多くの貴重な科学技術に関する資料の収集により有意義なコレクション形成をなし、また科学技術資料を所蔵する機関や企業、個人に対してその価値を付与する研究活動は極めて重要である。	
進捗状況の 妥当性	科学技術史資料の所在調査、データベース化、インターネットでの情報開示、登録制度、コレクション形成など、順調に進行している。科学技術史については、3D プリンターを活用したコレクションの形成も期待する。 研究成果は、論文、出版物、報告書、学会報告、講演など多数にわたり、また特別展や企画展、ミニ企画展などを通じて広く教育普及する成果を順調に上げているといえよう。従って、当初目標への達成度は高いと考える。	
総合評価	A	S：大変優れた成果をあげている。 A：目標に向けて順調に進捗している。 B：順調ではないものの進捗している。 C：進捗していない。
全体コメント	綿密な調査や協力を経て、失われつつある科学・技術に関する歴史的資料をまとめて登録し活用することは、理工学部や産業技術史資料情報センターの活動にとって極めて重要なことであり、広く人類の文化遺産の保存・継承にとっても大変有意義なことである。博物館での展示のみならず、登録された資料の情報共有によって相互的な活用、あるいは外部研究者からのアクセスを容易にし、未来への文化遺産の伝承の有用性を生じることになる。こうした丹念な調査研究の積み重ねによって、我が国の産業技術史が体系化されると思われる。 本研究を進めるにあたり、次の二つのことを心がけて頂きたい。一つは、所蔵機関（所蔵者）と今後の調査研究者に迷惑をかけないようにすること、逆に所蔵機関（所蔵者）のためになるようなことは可能な範囲で取り組んでいくこと。もう一つは、調査によって収集した資料や獲得した情報を外部の人々にもアクセスしやすい形で積極的に公開し、そのためにどのような形式で公開するか、早急に検討して決定しておく必要がある。 理工学資料は大型のものが多く、収集するにも収蔵スペースを確保するにも大きな問題が伴うと思われる。動態保存など魅力的な活用方法もありうるが、活用と保存が相反する。地域の産業とともに資料が保存され、より地域学に根ざした保存を目指しつつ、産業界の協力を得ながら（企業に任せるだけではなく）国としての理工系資料保存の方針を明確に国民にわかるように発信していくことを望む。	

資料 6－1 中間評価（H28-32 年度）

総合研究「博物館・植物園資料を活用した絶滅寸前種に関する情報統合解析」

意義・目標の 妥当性	近年、日本でも多くの野生生物種が絶滅に瀕していることは周知のことである。本研究は、科博が所蔵している標本を情報源として活用し、DNA や生態の情報なども調べて、絶滅寸前に陥っている種の生物学的特性を解明し、それによって適切な保全につなげようというものである。本研究は、極めて重要な課題に取り組んでおり、その目的の設定も妥当である。	
実施体制の 妥当性	植物と菌類を中心に、動物まで含めて幅広い生物群を専門とするメンバーを揃え、不足する部分は館外の研究者の協力も仰ぐことで、日本の幅広い絶滅寸前種を研究対象にできる研究体制になっていると思われる。今後、集団遺伝学分野で、理論と実践を橋渡しできる研究者（保全遺伝学者）のアドバイスを受けることで、全体的な伸び代がさらに拡大する可能性も感じられた。	
進捗状況の妥 当性	科博が絶滅寸前種の 68.7%の標本を所蔵していることを明らかにしたことは、残りの約 30%をこれから積極的に収集していくための適切な計画を立てる上でも大きな前進である。自然史標本の破壊を避けつつ DNA を抽出する方法の開発等、本プロジェクトに留まらない、より広い領域への波及効果が期待できる成果も上がっている点は高く評価できる。全体的に動物学分野での成果が少ないのが若干気にはなる。	
総合評価	A	S：大変優れた成果をあげている。 A：目標に向けて順調に進捗している。 B：順調ではないものの進捗している。 C：進捗していない。
全体コメント	絶滅寸前種のゲノム情報を次世代シーケンサーも最大限に活用して調べる、あるいは絶滅したと思われていたラン科植物のシマクモキリソウの未開花個体を南硫黄島で再発見し、それを栽培下で開花させ、その生物学的特性を明らかにできたこと等は特に高く評価できる。今後も、科博のコレクションと設備を活用し、絶滅に向かう種の予測なども期待できる。 収蔵標本を活用した研究は、標本自体の価値を上げ、一般にも標本の重要性を認識してもらう効果もあり、非常に高く評価できる。標本から抽出した情報のデータベース化は地道な作業であるが、環境保全政策のインフラ整備として欠かせないものであり、将来に向けた社会的貢献として重要である。また標本が不足している絶滅寸前種を明確にすることで、今後のターゲットリストが作成でき、収集計画がより意味のあるものになるなど、標本収集にとっては理想的な研究体制になっていると思われる。 なお、研究によって得られた情報をどのような手順でどこまで見られるようにするかについては、合理的、論理的に詰めていく必要があると思われる。	

資料 6－2 中間評価 (H28-32 年度)

総合研究「ミャンマーを中心とした東南アジア生物相のインベントリー

－日本列島の南方系生物のルーツを探る－

意義・目標の 妥当性	ミャンマーは世界的に見ても生物多様性の特に高い地域である東南アジアに位置しているが、自然史調査は進んでいない。このような場所で詳細かつ幅広い自然史調査を行うことは、数多くの新分類群、その他の発見に結びつくことが期待できるだけでなく、本邦を含む東アジアの生物相の理解に必要な不可欠なものである。生物多様性の保全の観点から国際貢献にも結びつく。本研究の意義は大きく、その目的設定も適切である。	
実施体制の 妥当性	内部の研究員に加え、外部より関連する対象領域を補完する形で研究者を構成された体制は妥当である。特に植物と動物に関しては、幅広い生物群を対象にして調査・研究が行えるメンバーが揃っており、十分に研究計画を遂行できる体制になっている。さらに地質の専門家などもチームに加わっていることで、単独の研究部では決してできない研究が展開できると期待される。	
進捗状況の妥 当性	ミャンマーの天然資源環境保全省森林局と科博の間で研究協定を締結し（生物多様性条約が求める ABS を遵守するためには不可欠）、植物、菌類、動物のミャンマー国内での調査を既に十数回も行っており、本研究は順調に進捗している。ただ、全体的に動物学分野での成果が少ないことが若干気になる。	
総合評価	A	S：大変優れた成果をあげている。 A：目標に向けて順調に進捗している。 B：順調ではないものの進捗している。 C：進捗していない。
全体コメント	研究部を超えて共同で研究を進める総合研究の利点がミャンマーでの調査で生かされている。調査国の事情により多様な困難があるようであるが、着実に成果をあげており、今後のさらなる進展が大きく期待される。全体として系統地理学的な視点をもう少し意識しながら、地質の専門家とも密に情報交換して現地調査を進めていくことを期待する。 標本について、日本と共通性も高いミャンマーの自然史標本を収集しコレクションを構築することは、高く評価できる。特に現地研究施設でのコレクション構築や人材育成もゴールに入れており、科博が担うべき国際貢献を実施しており意味のある総合研究と思われる。現地の研究者と連携し、現地での通年の標本収集などを行うと、現地コレクションの構築や量的な成果がより充実した結果になるとと思われる。また現地での人材育成のみならず、科博で学位取得への長期の留学教育を促進するなど、さらに発展させることのできる総合研究と思われた。	

資料6－3 中間評価（H28-32年度）

総合研究「化学層序と年代測定に基づく地球史・生命史の解析」

意義・目標の 妥当性	国立科学博物館に収蔵されている膨大な岩石や堆積物の試料について、近年国立科学博物館に導入された質量分析装置を駆使して、これまで以上の精度と解像度で同位体の組成分析や年代測定を行ない、それによって得られる新しいデータを解析して地球と生命の歴史を明らかにしようとする本研究は、国立科学博物館が担うべき使命に合致しており、その成果は大いに期待できる。従って研究の意義や目標は妥当である。	
実施体制の 妥当性	地学研究部の鉱物科学研究グループを中心に、館内外の研究者が加わり、化学層序を確立するための実施体制が組まれている。また総合的な見地からの検討が可能な体制となっており、この点でも妥当と考えられる。地学分野中心の総合研究であるが、他の分野への波及効果も期待される。	
進捗状況の妥 当性	新たに導入された質量分析装置が十分に活用できるように分析方法を検討し、また分析試料を厳選するなど、化学層序確立のための基礎的な作業を実施し、得られたデータを総合的に解析・検討することにより、中生代末の恐竜絶滅の原因解明など5つに絞った目標に向かって着実に研究を進めている。その成果には大いなる期待が寄せられる。	
総合評価	A	S：大変優れた成果をあげている。 A：目標に向けて順調に進捗している。 B：順調ではないものの進捗している。 C：進捗していない。
全体コメント	国立科学博物館に所蔵された膨大な岩石や堆積物の試料（コア試料を含む）から厳選したものについて新たな質量分析装置を駆使して分析し、これまでになく精度と解像度で化学層序を確立して、地球史と生命史を解明しようとする本総合研究は地道ではあるが重要で壮大な総合研究である。一般的によく知られた中生代末の恐竜絶滅の原因究明などの厳選した5つの目標が設定されている。現在、国内外で注目されている中期更新世の「チバニアン（千葉時代）」登録においても、新たな発見や定義づけがなされることが期待される。堆積物のコア試料については、緻密で高精度の化学層序と年代が明らかになると、地球環境の詳細な変遷などの解明につながり、他分野との連携によってより総合的な研究への飛躍的な発展・展開が期待される。またこれまで、様々な理由で廃棄されたり死蔵されてきたコア試料の標本としての価値が著しく高まり、広く研究に活用されるようになることが期待される。その際、試料の保存や管理等に必要な人員と施設が拡充されることが望まれるが、現在の財政状況や高齢社会の到来などを勘案すると、高齢有識者（ボランティア）の活用なども検討されるべきであろう。	

資料 6－4 中間評価 (H28-32 年度)

総合研究「黒潮に注目した地史・生物史・人類史」

意義・目標の 妥当性	本研究は、地学研究部の最近の研究で明らかになりつつある東シナ海での過去の黒潮の流路の解明をさらに進めると共に、その情報に基づいて、人類が過去にどのように琉球列島に渡ったか、野生の動物や植物がどのように移動・分散して現在の状況になったかなどを総合的解明することを目指したものである。意義深いテーマに取り組んでおり、設定された目的も妥当である。	
実施体制の 妥当性	館内だけでなく、海外も含めた館外の研究者が参加した実施体制は、多分野で多様な性格を持つ本研究において、研究計画を十分実施できる体制になっている。黒潮動態、海底環境、海洋生物、海棲哺乳類、陸上生物、人類活動と各テーマ別に研究を進めつつ、成果統合のための研究会を開催するなど、総合研究としてふさわしい実施体制である。	
進捗状況の 妥当性	6つの研究班で順調な進展が見られる。さらに海洋学、地質学、生物学と、専門分野が大いに異なる研究者が情報交換をしながら本総合研究を進めている。一筋縄ではいかない困難も予想されるが、得られるであろう結果の位置づけ、学術的背景の整備等も含め、全体として順調に進展していると認めることができる。	
総合評価	A	S：大変優れた成果をあげている。 A：目標に向けて順調に進捗している。 B：順調ではないものの進捗している。 C：進捗していない。
全体コメント	6つの班がそれぞれ着実な成果をあげており、全体会議を通して各班の研究を共有しようとしていること、さらに外部の専門家を招聘してより広い視点を持とうとしていることなど、順調に展開している。 分子系統学的手法に基づき定量的、確率論的に検証可能な系統仮説や分岐年代仮説を、関係する種系統の地理的分布と対応させて総合するいわゆる系統地理学的手法が一般化しつつあるが、漂流・分散イベントが、未だ複数の仮説の統合に基づく“類推”ではある面は否めず、少なくとも現段階では琉球を含む多くのエリアで、人類を含む多くの動物群を対象に実験的に傍証を積み重ねて検討する価値は大きいと言える。こうした検証が、ヒトとともに、それに付随したと予想される他の生物群（ネズミ類の一部やヤモリ類の一部といったヒトの commensal 生物）の系統地理仮説の構築・検証にも展開してゆくことを期待する。 一連の研究過程で、黒潮と関係のある標本・資料が体系的に収集されている点も評価できる。さらに、岩波の「科学」に和文レビュー論文を載せ、その pdf を誰でも無料で読めるようにネット上に公開していることは重要な「成果の社会普及」である。終了後の成果の発信にも期待する。	

資料 6－5 中間評価（H28-32 年度）

総合研究「我が国における科学技術史資料の保存体制構築に向けた基礎的研究

－現存資料の保存状況とその歴史的背景－

意義・目標の 妥当性	本総合研究は、科学技術史資料についてこれまで収集保存してきたことに加え、日本国内における組織的な保存体制の確立を目標とするものである。多岐にわたる科学技術史資料を研究・開発機構ごとにコレクション群の設定を行い、個々の資料における各種の位置づけの調査を実施し、そのデータを集積して広く横断的に機関相互の有効な利用をはかるということは、未来への資料保存と活用のために必要かつ早急な実施を望まれ、本調査研究の意義や目標は、妥当であると考えられる。	
実施体制の 妥当性	理工学研究部のプロジェクトリーダーを中心にした部内研究員のほか、館内の動物・植物・地学の各部の研究員や産業技術史資料情報センターの研究員が参画し、他機関の研究者を加えた本研究の実施体制は、多種多様にわたる貴重な科学技術に関する現存資料の調査と保存状態の把握に有効な実施体制と思われ妥当と考える。調査対象となる機関や資料の量は非常に多いが、実施体制の物的人的な拡充をはかるよりも、現在の実施体制でできる範囲で調査を進めることが適切だと思われる。	
進捗状況の 妥当性	多くの研究機関や試験所などに現存する実務的資料を含めた大量の科学史資料の保存について、関連機関の協力体制をとりながらの研究は、悉皆調査を目標としながらも、実際に対応可能な機関から着手し、そのデータベース化などを通じて、より広く多くの情報提供へと導かれるものである。特別展等にも研究機関からの適切な興味深い展示品を陳列できており、成果が達成されている。	
総合評価	A	S：大変優れた成果をあげている。 A：目標に向けて順調に進捗している。 B：順調ではないものの進捗している。 C：進捗していない。
全体コメント	本研究は、今後の産業技術史資料情報の公開と活用にとって極めて重要であり、大局的に見ても人類の技術発展史を示す文化遺産の保存・継承としても大変有意義である。悉皆調査は、かなりの期間を要すると思われるが、現段階で保存すべき資料や所蔵機関への資料のもつ重要性を説く有用性など、本調査の実行は急務である。また、日本国内で収蔵スペース不足が深刻な中、科博のみならず、日本国としてどの程度のコレクション収蔵施設が今後必要であるかという答申の作成も期待する。 調査にあたっては、所蔵機関（所蔵者）と今後の調査研究者に迷惑をかけないようにすること、逆に所蔵機関（所蔵者）のためになるようなことは可能な範囲で取り組んでいくことを望む。また、調査によって収集した資料や獲得した情報を外部にも積極的に公開していくこと、そのためにどのように公開するかについて早急に検討して決定しておく必要もある。	